



千葉動力車

一選別解雇撤回の闘いを中心軸に— 第31回 路線的自信固めた定期委員 闘

九四年闘争の勝利へ—闘う立場を貫く!



日本労働運動の改革へ

勝利の力掌握る国鉄闘争!

動労千葉第三一回定期委員会が、二月一六日、千葉県観光物産センターにおいて開催された。
昨年第二〇回定期大会方針の、「全国にはばたこう」の下、われわれはこの間、全国二〇箇所の国鉄集会所を成功させ、大量失業首切り時代の到来の中、闘争団を基軸に政府・権力に対して闘う水路を築きあげてきた。

本定期委員会は、その成果のうえに起って、清算事業団闘争の解体を策す、「一一・二四中労委命令」弾劾、九四春闘勝利、新たな一〇万人首切り攻撃粉砕を中心とする当面する取り組みについて、闘う方針を全体で確立した。

委員会は、議長に館山支部・吉田委員を選出した後、冒頭、本部・中野委員長のあいさつを受け(要旨別掲)、続いて執行部より、

経過報告・方針提起・暫定予算等が一括提起され、質疑に入った。

質疑の中で出された主なものは、
① 乗務員分科として、四月二二日、動乗勤の学習会を行なう。

この二月は雪害・踏切障害等列車が乱れることが多かったが、一旦乱れると一日中乱れている。現在の千葉支社は、列車の整理すら出来ない。乗務員の運用にも問題がある。さらに、ストライキの時には弁当を出しながら、雪など異常時には食事もとれずに乗務をさせられるなど問題だ。

② この間の異常時において、泊明けで一四時過ぎとなるようなことがあった。変番も現在ユニットになっているから出来ないなど、休養も取れないというのが実態だ。又、凍結防止臨時が入ると、公休呼び出しなどで三人回しで変番させられる。その負担が予備に回っているなど問題が多い。

③ 幕張電車区では、年度末合理的な問題が多い。

化として、構内作業体制の見直し攻撃がかけられてきているが、災害異常時には、予備車がないため運用面から、夜間に作業過密化するというのが発生している。現場の声がまったく反映されていない施策だ。又、検修作業の将来展望・技術断層の解消など、何の方途も見通しも見えてこない危惧を抱いている。

④ 貨物への動乗勤改善提案が、三月末にもあると言われている。闘いの山場は六月頃になると思うが、九四春闘はその前段の節として、動乗勤改善攻撃粉砕と結合させた闘いとしてとらえるべきだ。

⑤ 九四春闘だが、貨物と旅客の賃金格差がさらに広がるのではないかと懸念を持っている。断固闘うべきだ。

⑥ 貨物への格差問題は、「分割・民営化」の矛盾であると言えなが、現場は「赤字だから」しかたないとはならない。世論調査では、

戦後日本の政治・経済・行政・物の見方・考え方などが、右の側から大きく変えられようとしている。中労委命令の意図は、①清算事業団闘争の解体②労組法を逆にとつて、労働者を鎮圧していく攻撃と見てとることが出来る。今までの価値観が変わったということであり、基本的人権のうえに労働三権によって、二重に権利が保障されている労働者に対し、それを根底からつぶしていくもの、団結そのものを破壊するものだ。労働者の状況を一変させる考え方・気運が生まれていることは、今までの運動のやり方・考え方は通用しない。われわれは「分・民」に身体を張って警鐘を打打してきた。その意味においても、動労千葉の団結を一段上げていく時期にきていると、率直に思う。闘いの原動力は職場生産点にある。当面九四春闘を、九四年闘争の大きな柱の第一歩として闘い抜き、三月末の結成一五周年イベントへつなげたい。

中野委員長あいさつ要旨抜粋

本定期委員会において、特別執行委員の指名が行なわれました。渡辺靖正 銚子支部 三五才 運転士

今春闘を賃金ベースアップ止むなどという考えを持っている労働者が、五〇%にも及んでいるとされている。「赤字」を理由とした資本の攻撃は、労働運動の根幹に関わる問題だと考えている。

⑦ 佐倉では、「業務運営の効率化」(四月一日実施計画)と称して、計画業務の見直しによる要員削減攻撃がかけられている。「分・民」時五一名だった要員は、今では三五名にまで削減されてきた。もはや我慢も限界だ。具体的にどう闘うのか。

⑧ 定数昇格補充(七等級)の問題だが、五五才到達者を飛び越えてその下にきた。現場長交渉においても、それに対する納得する説明も出来ないのが実態だ。今までのスタイル、五五才到達者に対する扱いを再度確立すべきだ。

⑨ 政党支持問題だが、社会党に対して大きな疑問を持っている。米開放・小選挙区制・減税問題と裏切り続けている。どう考えているのか?

等々、現場の実態・状況に踏まえたものが出され、特徴的には、今日の労務政策のみを優先させてきたがゆえの、JRの業務執行体制の崩壊・解体状況を浮き彫りにするものとなった。

総括答弁を含め、職場生産点からの闘いこそが基本であることを確認し、ひとつひとつの事象を個別的にこだわるとともに、それを収斂し、戦略的闘いの仕組み、闘いの構えを考えていくことが、本

当の勝利へと結びつくものとなることを全体のものとした。